

海外の話題

シンガポール、9月の出来事から

農林中央金庫 シンガポール支店長 栗原 晃

松岡圭祐氏の人気作品「千里眼シリーズ」に「シンガポール・フライヤー」という作品がある。これはシンガポールを舞台に、元航空自衛隊F15戦闘機乗りのスーパーウーマンが、鳥インフルエンザを撒き散らし世界を恐怖に陥れる闇の組織と戦う物語だが、今年開業した世界最大の観覧車(シンガポール・フライヤー)、その足元の市街地コースで9月末に開催された史上初の夜間F1レース(シンガポール・グランプリ)、さらには世界中で危機が叫ばれている新型インフルエンザと、当地をめぐる話題が盛りだくさんだ。かなり荒唐無稽な部分もあるが、ホットな情報感覚には感心させられる。

さて、そのシンガポール・グランプリだが、第一世代の指導者層はこうしたイベントを嫌っていたと聞いたことがある。カジノ、マカオ・グランプリに象徴される遊興的印象の強い香港、マカオとは異なる「潔癖さ」が久しくシンガポールのウリモノだったのである。しかし、近年ウェルス・マネジメントに力を入れている政府としては、富裕層をひきつける「観光の目玉がない」ことを直視せざるを得なくなったのかもしれない。観覧車に続きF1を誘致、さらには来年末の開業を目指してカジノを備えた統合リゾート施設の建設にも取りかかっている。

この2年ほど外国からヒト・カネが流入し高級マンションの建築ラッシュが起こり、それが飛ぶように売れた。我々駐在員の家賃もうなぎのぼりで、急騰する家賃に耐えられず転居する人々からは「これはバブルだ」という怨嗟の声も上がっていたところに、サブプライム問題を端緒とする世界的な景気後退の波が押し寄せようとしている。住宅価格の上昇も頭打ちになり、折からの金融市場の混乱の中で首相臨席のもと開催されたシンガポール・グランプリは、心配された雨にも祟られず激戦の末ルノーの優勝で幕を下ろした。手に汗握るレースは日本や欧州に生中継され、シンガポールを代表する景観を世界にアピールできたことは、ひとまず成功といえるだろう。

小説のもうひとつの題材である新型インフルエンザだが、たまたま8月末から9月にかけて当地の金融業界を挙げた危機管理テストが実施された。これは参加者を集めた説明会開始から取りまとめに至るまで約半年をかけ、銀行・証券・保険等ほとんど全員参加型の本格的なテストだった。シンガポールはSARS(重症急性呼吸器症候群)で多数の患者・死者を出し、景気に大きな影響を受けた苦い経験を持つが、その反省が新型インフルエンザへの取組に活かされているように思う。銀行窓口では来店客を完全装備の銀行スタッフが出迎え体温チェックを行うなど、ほとんど国を挙げてのイベントといえるほどで、これにより一般市民にも新型インフルエンザの脅威を印象付ける良い機会となったに違いない。

シンガポールはF1開催の権利を5年間取得しているようだ。カジノホテルのほかテーマパーク建設の計画もある。9月に本格化した金融市場の動揺が世界経済にどの程度の影響をもたらすかは定かではなく、新型インフルエンザがいつ発生するかは誰にも分からないが、数年来、順風満帆で突き進んできたシンガポールにとって、これからチャレンジングな時期が待っているのは確かなようだ。旧世代のタブーに挑戦してきた新世代の現指導者層の舵取りに期待したい。